第六講　空所補充問題解法　30分

次の文章を読み、後の問に答えよ。

日本の庭を「時の庭」と私が呼ぶとき、そこには必ずしも廻遊式庭園だけが思い浮べられているのではない。空間的規模において、修学院離宮といえども、ヴェルサイユとは到底比較にならないが、いかにひろくても一定の限定された空間に他ならぬ庭園というものは、そこに世界を包摂するという目的と、同時に、そこを足がかりにして世界を離脱するという目的とを、双つながら含んでいると考えられ、その相反する二つの目的のニュアンスの濃淡によって、西洋庭園のさまざまなスタイルの変遷があらわれたにしても、そこに何ら「時間」の要素を導入しなかった、ということが、西洋庭園の大きな特色であるように思われる。

水の使用法一つにしても、滝や渓流は、噴水と本質的にちがっている。噴水はいわば水の［ 1 ］であって、水は或る形に固定されて、しかも自然ではめったに見られない整合的な姿で空中に浮んでいる。滝や渓流は流れている。又、日本庭園に多用される池も、滝によって水を供給され、渓

流へ導かれて橋を架せられる。[2]橋が又、建築におけるもっとも時間的な要素である。

造園術において、政治学的な比較も亦（また）、芸術的哲学的比較と同様に有効であるにちがいない。仙洞御所では、上皇というものの特殊な政治的位置と、この庭の構造とは、わざと巧まれたもののように似合っている。もし上皇という地位が、ヴェルサイユの庭のような壮大明晰（めいせき）な統治の図式に日々直面していたら、その地位自体が甚だ変ったものになったかもしれないのである。

それを別としても、日本の造園術には、寝殿造の庭のような円満な遊興形式にせよ、中世以降の隠遁者（いんとんしゃ）流の庭にせよ、権力そのものの具現であるような庭の形式をかつて知らなかった。庭が安息であり、権力否定の場であることは、金をかけた庭ほど目ざしているところのものであり、それは[3]精妙な偽善の技術とさえ見えるのである。

空間を無限に拡大し、その空間をさまざまな建築的資材で構築し、シンメトリカルに区分し配列する西洋の庭は、空間構築自体による世界離別の傾向を秘め、それがバロックを生んだとも言えるであろう。又、純正ルネッサンスの平面的構造は、いかにひろい空間であっても、空間を理性的空間としてとどめるラテン的理想を表現して、秩序をして完全な可視的な秩序

たらしめ、世界包摂の雛型(ひながた)を生み出した。

　しかし、時間を庭へ導入することを、西洋の造園術は思いつかなかった。もし時間の原理を導入すれば、形態は腐蝕(ふしょく)され、秩序は崩壊し、モニュメントは無効になるであろうからである。立木はたえず時間の影響をうけて変形するので、その刈り込みは庭師の多忙な仕事であったが、樹々は配列も形態も、彫刻同様にはっきり反［4］的なものであらねばならなかった。

　庭がどこかで終る、庭には必ず果てがある、という観念は、西洋の専制君主にとっては、我慢ならぬものであったに相違ない。そのためには、空間を支配し、空間を構造で埋めなければならぬ。ヴェルサイユの庭はその極致である。

　私は冬のきわめて寒い日に、ヴェルサイユを訪れたときのことを思い出す。庭は謁見の間から見渡されたが、気が遠くなるような壮大な規模で、いざ庭へ下りてみると、どこへ行くにも何キロという距離は、歩く疲労そのものよりも、歩くにつれて募る寒気のために、身をすくませてしまう。宮殿のテラスから、ラトヌ女神の彫像のある大水盤のまわりを歩くだけで、人間の庭の規模とは思えぬほどであるから、彫刻群と木立に左右を囲まれた巨大な芝生絨毯(じゅうたん)の傍らをすぎ、その絨毯の連続としての大運河の、ど

こまでつづくとも知れぬ川岸をゆくときには、寒気に体は凍りつくようになって、こんな大空間を、自動車もない時代の人間が使いこなしたことは、[5]われわれの及ばぬ精力のように想像される。

　しかし、いくら歩くのに時間がかかっても、[5]われわれは、時のない場所を歩いているという感覚を捨てることはできない。なぜならこの厖大（ぼうだい）な規模の中で、[5]われわれの歩幅が小さいのは単なる偶然であり、一枚のチェスの盤上をゆく蟻（あり）のような[5]われわれの存在に比して、ルイ太陽王の巨大な手は、この大庭園をチェス遊びに手頃な広さと考えていたことは自明であって、時間を感じようにも、こんな壮大な人工的構築物のなかを移動する時間というものは、そもそも[5]われわれの生活体験の裡（うち）には存在しないからだ。

　庭がどこかで終る。庭には必ず果てがある。これは王者にとっては、たしかに不吉な予感である。

　空間的支配の終末は、統治の終末に他ならないからだ。ヴェルサイユ宮の庭や、これに類似した庭を見るたびに、私は日本の、王者の庭ですらはるかに規模の小さい圧縮された庭、例外的に壮大な修学院離宮ですら[6]借景にたよっているような庭の持つ意味を、考えずにはいられない。おそらく日本の庭の持つ秘密は、「終らない庭」「果てしのない庭」の発明にあって、

それは時間の流れを庭に導入したことによるのではないか。

仙洞御所の庭にも、あの岬の石組ひとつですら、空間支配よりも時間の導入の味わいがあることは前に述べた。それから何よりも、あの幾多の橋である。水と橋とは、日本の庭では、流れ来り流れ去るものの二つの要素で、地上の径をゆく者は橋を渡らねばならず、水は又、橋の下をくぐって流れなければならぬ。

橋は、西洋式庭園でよく使われる庭へひろびろと展開する大階段とは、いかにも対蹠的な意味を担っている。大階段は空間を命令し押しひろげるが、橋は必ず此岸から彼岸へ渡すのであり、しかも日本の庭園の橋は、どちらが此岸でありどちらが彼岸であるとも規定しないから、庭をめぐる時間は従って［7］性を持つことになる。時間がとらえられると共に、時間の不［7］性が否定されるのである。すなわち、われわれはその橋を渡って、未来へゆくこともでき、過去へ立ち戻ることもでき、しかも橋を央にして、未来と過去とはいつでも交換可能なものとなるのだ。

西洋の庭にも、[8]空間支配と空間離脱の、二つの相矛盾する傾向はあるけれど、離脱する方向は一方的であり、憧憬は不可視のものへ向い、波打つバロックのリズムは、ついに到達しえないものへの憧憬を歌って終る。しかし日本の庭は、離脱して、又やすやすと帰って来るのである。

（三島由紀夫「西洋の庭園と日本の庭園」より）

問一　空欄1に入る二字の語を文中から抜き出して答えよ。

問二　傍線部2のように作者が考える理由としてふさわしい文章になるよう、次の一文の空欄2A、2B、2Cに入るもっとも適切な語句を、それぞれ文中から抜き出して答えよ。

水と橋は［　2A　］であり、橋は［2B］と［2C］を結ぶものと考えているから。

問三　傍線部３「精妙な偽善」の説明としてもっとも適切なものを次から選び、記号で答えよ。

イ　お金をかけながら、権力がないと思わせるような庭園を造ること
ロ　お金をかければ、安息が得られる庭園を造れると信じること
ハ　お金はかけなくても、権力が否定される庭は造れること
ニ　お金がないのに、偽って安息や権力がないと思わせようとすること
ホ　お金があれば、安息と権力を否定しなくてすむような庭が造れること

問四　空欄４に入るもっとも適切な語を次から選び、記号で答えよ。

イ　自然　　ロ　社会　　ハ　比例　　ニ　超越　　ホ　理念

問五　傍線部５「われわれ」を作者は強調しているが、その理由としてもっとも適切なものを次から選び、記号で答えよ。

イ　ヴェルサイユの庭園は、「われわれ」の世界から離別して、超越した場所に造られていることを強調するため

ロ　ヴェルサイユの庭園が、「われわれ」の肉体や感覚とは異なった規模で造られていることを強調するため

ハ　ルイ太陽王の時代は、「われわれ」に比べてはるかに時間と空間を持て余していたことを強調するため

ニ　「われわれ」の生活からは、ヴェルサイユの庭園にある規模の仕掛けは想像できないことを強調するため

ホ　「われわれ」の世界は、ヴェルサイユの庭園を通して巨大な力で統治されていることを強調するため

問六　傍線部６「借景」の意味としてもっとも適切なものを次から選び、記号で答えよ。

イ　時間の概念を利用して「終わらない庭」という印象を与える造園法
ロ　庭園の外にある山などの風景を使って庭の景色を想定する造園法
ハ　庭園から離れた景色と時間を組み合わせて庭を形成する造園法
ニ　庭園の規模を故意に縮小して四季の景色を際立たせる造園法
ホ　四季に応じて変化する風景を庭園の中心に置く造園法

問七　二箇所の空欄７に入る語句としてもっとも適切なものを次から選び、記号で答えよ。

イ　可逆　　ロ　確実　　ハ　可能　　ニ　規則　　ホ　合理

問八　傍線部8にある「空間支配」と「空間離脱」の説明としてふさわしい文章になるよう、次の空欄8A、8B、8C、8Dに入るもっとも適切な語を、それぞれ文中から抜き出して答えよ。

空間支配とは、庭の中に世界を［8A］する目的を持ち、いかに広い空間でも完全に［8B］な秩序を求めること。

空間離脱とは、空間を無限に［8C］し、建造物で空間を構築しながら、到達できない［8D］のものを憧憬すること。

問一

問二

2A

2B

2C

問三

問四

問五

問六

問七

問八

8A	8C
8B	8D

第六講　空所補充問題解法　解答

問一　彫刻

問二

2A　流れ来り流れ去るものの二つの要素

2B　此岸

2C　彼岸

問三　イ

問四　イ

問五　ロ

問六　ロ

問七

イ

問八

8A	8B	8C	8D
包摂	可視的	拡大	不可視